

地域プロジェクトⅢ・Ⅳ成果報告書

Halifax×函館プロジェクト

①背景・目的・概要

背景：函館市の姉妹都市のカナダ・ハリファックス及び、ノバスコシア州における地域課題には、函館市が抱える地域課題と類似したものが多く、これらの課題に対しての取り組みを理解し、それぞれの地域を比較分析することで、函館・道南地域の持続的発展を考える視点を養う。

目的：①ノバスコシア州及びハリファックスの地域社会の実態を理解する。

②ノバスコシア州及びハリファックスの事例を通じて、函館・道南地域の持続的発展に向けた視点を見つける。

③ハリファックス訪問の成果を、函館・道南地域の持続的発展につながる形で還元する。

概要：函館市の姉妹都市であるカナダ・ハリファックスについての事前学習で地域の抱える地域課題に対する取り組みを理解し、この知識を踏まえて現地研修を行い、地域で活動している様々な団体・組織を訪問し、函館・道南地域の持続的発展につながる視点を探す。

②年間スケジュール表

地域プロジェクトⅢ	地域プロジェクトⅣ
第1回 オリエンテーション 進め方、発表テーマの設定、Welcome to Nova Scotia (予習課題)	9月18-29日 ハリファックス現地研修 18・28-29日 移動日 20-27日 各種研修
第2回 Welcome to Nova Scotia	現地での知見の整理
第3回 移民・難民: Immigrant Service Association of Nova Scotia	函館市の地域課題の解決に向けた 取り組みの考案
第4回 貧困: United Way Halifax	2つのテーマに分け、函館の現状確認
第5回 児童福祉・人種: Akoma, Association of Black Social Workers	現状確認の方法としてインタビューの実施
第6回 市民協働: Engage Nova Scotia	インタビュー結果のまとめ・発表
第7回 若者・政治: Lindell Smith, Youth Council	成果発表会に向けた準備
第8-10回 第3回から第7回のテーマに関する 理解を深める、発表資料用意	函館・ハリファックス協会のクリスマス会にゲス トスピーカーとして参加
第11回 英語指導	クリスマスファンタジーでのパネル展示の準備
第12・13回 模擬ワークショップ	成果発表会
第14・15回 学生プレゼン練習 (ハリファックス中央図書館で発表予定)	

③プロセスと成果

このプロジェクトでは、2つのグループに分かれて活動を進めてきたため、それぞれのグループのプロセスと成果をまとめることにする。

○1つ目のグループは、ハリファックスでの研修を通して、現地のローカルガバナンスが函館と異なるということに気づき、それには次の3点が大きく影響していることを学んだ。1つ目はハリファックス市長のマイク・サベッジさんの地域政策に対する考え方だ。市長は自分より年齢的に長く生きることになる若者の意見や批判を受け入れることを重視していた。また、研修期間の中で行われていた「スイッチハリファックス」というイベントでは、市民の暮らしやすい地区を知るためのアンケート調査を行い、そこで住民に対して政治参加の促進を行っていた。2つ目に、市議会議員のリンデル・スミスさんの活動だ。彼は、若者に政治の面白さを伝えるということを目指して活動している。研修の中では、彼の活動の一つとしてあった住民と協働で作った公園も見えてきた。3つ目に、課題解決に取り組む市民団体に対しての支援を行っているユナイテッドウェイという組織だ。パートナーシップ協定というものを行い政府と企業の間組織的役割を果たしている。この3つの取り組みをまとめると、ハリファックスでのローカルガバナンスの形態として、市民と行政が手を取り合い、共通の課題意識が形成することによりまちづくりが進んでいくことを学んだ。この学びを踏まえ、函館に戻ってきてからは、西部地区に焦点を当て、行政と市民団体の両方にインタビューを行った。結果として、行政と市民の西部地区に対する理想の違いや、お互いの役割の認識の違いが明らかにすることができた。

○2つ目のグループは外国人住民のライフストーリー調査を行った。このグループではまず、現地の研修で「**Social Justice in Focus**」というイベントに参加したことがプロジェクトを進める契機となった。このイベントは「難民というバックグラウンドを持つ若者がワークショップへの参加を通じて社会正義や社会参加の意義を見つける」というもので、彼ら自身の語りからその人の人生や生き方が見えて鮮明に見えてきた。難民の若者の話を聞くだけでなく、「難民」という人たちの視点に立った考え方を体験することができた。加えて、ISANSという移民の支援団体を訪問し、そこで、移民をクローズアップしたストーリーブックを頂いてきた。そのストーリーブックからは、個人のストーリーの中でISANSの支援プログラムがそれぞれのハリファックスでの生活にどう生きてくるのかが浮かび上がってきた。以上の二点のハリファックスでの学びを受け、函館で暮らす外国人のそれぞれのライフストーリーから見えてくる「函館での暮らし」についての考察に至った。調査方法はインタビュー調査で函館で暮らす10人の外国人住民の方にインタビューを行った。インタビュー調査を通して、外国人住民の方が職場の仲間や家族のつながりの中で情報を得たり、手続きを行うなどして生活しているが、それは家族や地域住民の善意で成り立っているのではないかと考えた。一見、助け合いの形でいい事のように思えるが、それは同時に支援に至るまでがシステム化されていないという現状があるのも事実であった。これらの実情を受けて函館社会の一構成員としての市民として生活できているのかという問題意識をもった。

④総括と反省・今後の課題

総括と反省：ハリファックスでは現地の図書館とセントメリーズ大学、函館では函館・ハリファックス協会それぞれ発表を行うことを通じて、互いの地域課題に対する意識を共有し、両地域間の結びつきを強めることができた。また、反省点としては、言語能力不足によって現地の人の言葉を理解し、自分の意見を伝えるということが十分にできなかったことが挙げられる。

今後の課題：函館での活動が調査のみで終結してしまい、ハリファックスでの学びを十分に還元しきれなかったため、今後、卒論研究の形でさらに発展させ、政策提言に値するレベルでの問題の明晰化を目指すこと。

⑤地域からの評価

○現地での発表では、函館の外国人児童への対応や空き家問題の現状に関心を持って聴いてもらい、発表スライドもわかりやすくまとめられていると講評をもらった。同時に、現地の学生から、「建物のリノベーションだけでは不十分であり、人が入る仕組みを考えなければ、高齢化など根本的な問題の解決には結びつかないのではないか」、「観光客に対しての取り組みばかりしていると、地元の人が住めない環境になる可能性があるのではないか」などのコメントも受けた。

○函館・ハリファックス協会の方々より、若者の前向きな交流の様子を聞いて元気が出たなどの温かいお言葉も頂いた。

⑥メンバー一覧

指導教員：古地順一郎、中村直樹、森谷康文、パーソンズ・アンドレ

学生：石黒順也、佐藤遥、高橋佑、中村百恵、村上陽菜



E-03 ミャンマー国基礎教育支援プロジェクト 成果報告書

①背景・目的・概要

近年ミャンマーでは初等教育から後期中等教育までのカリキュラムの改訂が行なわれており、JICA が全面的に協力している。このカリキュラム改訂プロジェクトは、2014年5月から、2021年3月を年限として行なわれる長期的なものである。

JICA が協力するこのプロジェクトの主な内容は、ミャンマー国内の学校教育における全教科の新教科書・教師用指導書の作成を行うこと、新カリキュラムにもとづく新評価ツールを開発すること、新カリキュラムを全教員へ導入するための研修教材の作成、それらを活用した教員研修の実施を行うこと、そして、新カリキュラムを教員養成校へ導入することの4つである。世界的にも注目されるこの教育プロジェクトを直接見学することは、これからの国際社会における教育支援の価値を見出すことにつながると考えた。

そこで私たちは、現地の学校を訪問しミャンマーの教育について考察する・現地で活動する国際協力団体が行う基礎教育の普及プロジェクトに触れる・発展途上国の教育支援について考えることを目的として、本活動に取り組んだ。

②年間スケジュール

前期はミャンマー渡航に向けて、ミャンマーの教育の現状や文化・歴史等について事前学習を行ない、後期は以下のスケジュールでミャンマーに渡航した。

日程：2018年10月30日～11月4日

行程：1日目 移動

2日目 JICA 事務所訪問

3日目 ヤンゴン市内の学校訪問

4日目 ヤンゴン市内の文化施設見学

5日目 H.I.S.ヤンゴン支店訪問

6日目 移動



また、帰国後、当プロジェクトのメンバー一人一人が、現地滞在の記録をまとめ、そこでの学びや経験を共有する機会を設けた。

③プロセスと成果

1, JICA ミャンマー事務所

JICA ミャンマー事務所を訪問し、そもそも日本はなぜ政府事業として国際協力を行なっているのか、JICA は発展途上国支援において何を目標しているのか、JICA における駐在事務所の役割と駐在員の仕事といったことについてお話を伺った。教育分野に限らず国際協力という大きな枠に興味を持つことができた。

2, JICA ヤンキン事務所

ミャンマーの初等教育カリキュラム改訂プロジェクトについて学んだ。日本の初等教育との比較や、現地の教育課題を知るために訪問させていただいた。ミャンマーの教育に関する課題には、人材の不足、小学校の内容が少なく上級学校にそのしわ寄せがいつていること、学習機会の不足、問題解決型の授業ではないことなどがある。この課題を解決するために、プロジェクトでは、日本からの教育の専門家がミャンマーの初等教育の改善を行っている。具体的には、教師用指導書の作成や、教科書の改訂・作成、教育カリキュラムの編成を行っている。特に、教科書はもともと存在したが、文字ばかりで教え込む形になっていた。そこで、挿絵を増やして学習内容のイメージをつけやすくしたり、質問を含んだ内容を入れ学習者に考える機会を増やしたりしていた。

他の国の教育を大きく改訂することは驚きだった。日本の教育の良さをミャンマーの教育にも取り入れることができることは嬉しかったが、取り入れることで見えてくる課題をまた日本の教育の改善につなげることが大切だと感じた。

3, Great Light Private School

ヤンゴン市内にある「Great Light Private School」という学校を訪問した。この学校は幼稚部、初等部、中等部、そして、現在設立中の高等部から成り立っている。私たちは今回、高等部以外のクラスを見学し、交流させていただいた。幼稚部は、文字の書き方や歌を学んでおり、教師が礼儀を指導する場面も見られた。初等部では算数の授業をしており、教科書は英語で書かれたものであった。計算している様子を見ると、日本と異なる計算方法が使われていることがわかった。中等部では生物の授業が行われており、ここでも教科書は英語で書かれたものであった。中等部になると、英語を流暢に話すことができる生徒もおり、交流の時間に英語で質問してきてくれる生徒がいた。

交流は、歌の披露や質問を通して行った。私たちは日本の曲を歌い、お返しに子どもたちが校歌を披露してくれた。言葉は通じなくとも、表情や身振りで一緒に楽しく交流することができた。質問の時間には、進路についての悩みや日本の学生の間で流行しているものについてなどの質問を受け、気になることは日本の子どもたちと似ていると感じた。

4, シュエダゴン・パゴダ

仏教国ミャンマーの最大都市ヤンゴンにあるこの国最大の寺院シュエダゴン・パゴダを訪れた。当文化遺産の見学を通して、ミャンマーに根付く仏教文化と歴史について学ぶことが大きな目的であった。

ミャンマーの人々は非常に信仰心が厚いとされ、この日も多くの人々がこの寺院で祈りを捧げていた。彼らの生活には「八曜日」というものが存在するらしく、このシュエダゴン・パゴダでお参りをする際にも、各曜日の祭壇に行ってお参りをする。この曜日には、自分の誕生日の曜日が該当し、私達も一人一人彼らがするのを真似て祈りを捧げてきた。中にはピクニックを楽しんだり、単純にくつろいだりと国民の憩いの場となっている様子が見て取れた。

5, アウンサン博物館・国立博物館

シュエダゴン・パゴダに続き、アウンサン博物館と国立博物館の見学に向かった。

アウンサン博物館はアウンサン将軍が暗殺されるまで住んでいた邸宅を博物館にしたものである。ミャンマーのイギリスからの独立運動を主導した英雄が、アウンサン将軍である。またアウンサン将軍は、現ミャンマー国国家顧問であるアウンサン・スーチー氏の父親でもある。家具や服、蔵書などは当時の状態のまま保存されており、アウンサン将軍が射殺される直前まで執筆していた資料の展示などもあった。ミャンマーの歴史に大きく関わった人物の生活の跡を見ることができた。

次に訪れた国立博物館では、展示物はほとんどケースに入っていなかったため、間近で見ることができた。

ミャンマーの文化、伝統、暮らしの歴史に触れることができた。

6, H. I. S. ヤンゴン支店

ミャンマーにおける観光業が抱える課題を知るため HIS 事務所を訪問し、お話を伺った。そこで、大きな3つの課題を知ることができた。

1つ目はプロモーション不足である。HIS はプロモーション不足を改善するため、観光客目線に立って見ることができる動画を YouTube に投稿しミャンマーの知名度を上げようとする方策をとっていることを知ることができた。

2つ目は旅行代金が高額という課題である。日本からミャンマーに行く便が1つで航空会社間の競争がないため、旅行代金が高額であるという課題を知ることができた。

3つ目はコンテンツ不足である。ミャンマーにはシュエダゴン・パゴダ、寝釈迦仏、アウンサンマーケットの他に目立った観光施設が多くある訳ではなく、アトラクションなどの観光客の目を引くコンテンツの更なる発掘が必要とされている事が分かった。

④総括と反省・今後の課題

ミャンマーは私たちが想像しているよりも日本とのつながりが大きい国だ。ミャンマーの大学には日本語の専攻が設置されていたり、現地の企業で日本人に対応するためのセミナーが行われていたり、日本語を学ぶこと、日本について知ることが彼らのキャリアに大きな影響を与えていることがわかった。また、学校を訪問し、児童生徒の生の声を聞いたり、学習の様子を観察することで、教科書や教材が学習の質や児童・生徒の学習意欲に影響を与えているということを実感した。日本で使用されている教科書や教材のレベルの高さを再認識する一方で、一生懸命勉強に励むミャンマーの子どもたちのため、実施中のプロジェクトの成果が生かされることを保護者や教育関係者の多くが望んでいることだろう。

本プロジェクトを通して、私たちの発展途上国の基礎教育の更なる普及に寄り添っていきたいという考えがより深まった。訪問先の学校長によると、まだまだ教育支援に協力してくれる人材が必要とのことなので、来年度も継続してプロジェクトを行うことになった暁には、学習用具の提供など、微力ながらも私たちに出来ることを考え、支援を行えるようにしたい。また、今年度得られた様々な情報や経験を発信する手段が今回は限られていたので、より多くの方々に知っていただけるよう、情報発信の方法についても工夫出来るよう努めたい。

⑤地域からの評価

多くの人にとっては、普段あまり見聞きすることのない国の意外な日本との繋がりや国の事情を知れたことが、新鮮だったようだ。ただし、中には、JICAの協力のもと行われている教育プロジェクトについて、どれだけ優れていても新しいものを途上国に持ち込むことで馴染まない可能性があるのではないか、という意見もあった。日本に暮らす我々が彼らに向けた支援を行うときのことをこれから考えていくために必要な見方として受け止めたい。実際は、職員の方々が、ミャンマーで暮らす人々の生活に即した形でプロジェクトを進めている。その様子をこちらの都合上発信出来なかったことに関しては、非常に申し訳なく思う。そして、この場を借りて、当プロジェクトに携わって下さった、田中先生を始めとする多くの方々に感謝を申し上げたい。

⑥メンバー一覧

指導教員 田中邦明 石井洋

学生

5413 藤山 仁司 5424 村田 幸恵 5447 佐々木 諒平

6410 長谷川 朋美 6412 平 彩 6424 杵渕 亜弓

6434 佐々木 慎吾 6425 遠藤 史崇 6448 峯田 盛史